

Title	辻邦生『安土往還記』論 : 「孤独」と、「私」の 「崩壊」
Author(s)	岡崎,昌宏
Citation	語文. 2002, 78, p. 44-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

辻邦生『安土往還記』論

――「孤独」と、「私」の「崩壊」

本論の課題

して刊行された。 月号に連載され、大幅な加筆の後、同年八月筑摩書房より単行本と『安土往選記』は「展望」一九六八年(昭和四十三)一月号、二

この小説は主な舞台が十六世紀末の日本に設定されている。それている。として読んでいるらしい著作も存在する。

を経たのちに得られたものではなく、なかには〈主題からの探索〉も先行研究には多い。しかしその理由は、たいてい十分な作品分析その一方で、この小説はいわゆる歴史小説ではない、とする意見

岡崎昌宏

(4) (4) (5) たいう、辻自身が述べた方法にその根拠を安易に求めているものは少ある。そもそも、『安土往還記』がいわゆる歴史小説なのかどうか、ということでいえば、歴史小説でないとはいいきれない。だからこと、明代的な問題を扱ったものだという読みを提示するには、作品の十分な検討が不可欠なのである。しかし残念なことに、歴史小説の十分な検討が不可欠なのである。しかし残念なことに、歴史小説の十分な検討が不可欠なのである。しかし残念なことに、歴史小説ないように思われる。

か。

「大殿」の具体的な名前は明らかにされていないのだろうがとするならば、どこまで歴史上の人物を意識すべきなのだろうだとするならば、どこまで歴史上の人物を意識すべきなのだろうだとするならば、どこまで歴史という歴史上の人物を安易にもちだらである。の具体的な名前は明らかにされていないのだが)か中では「大殿」の具体的な名前は明らかにされていないのだが)からでは「大殿」の具体的な名前は明らかにされていないのだが)かっているがある。

する高貴な「大殿」(あるいは信長)の生き方を描いたものだ、という点である。そしてそれはたいてい、自己を抑えてただ一事に徹底この小説から「大殿」の生き方ばかりを抜きだして論じているといさらに、すべての先行研究に対して最も不満に思うのは、なぜか

ている現在、ゴアで「無為」に日々を過ごしている「私」は、日本書かれた手紙からなっていることを忘れてはならない。手紙を書いしたイタリア人「私」によって、日本を去ったあとに友人に向けて

う論調であるといっていい。しかし『安土往還記』が、日本に渡来

私のなかに、こうした空白感が起ったことは、いまだかつてなとしているのである。 帯在中に何かを「うしな」い、そのことについてだけ手紙に書こう

とすると、それは私が地上に捜しあてた私自身だったかもしれのについてだけ君に書いておきたい気がする。あるいはひょっいことだった。それだけに私は、現在、ただ私のうしなったも私のなかに、こうした空白感が起ったことは、いまだかつてな

本帯在がどういう意味をもっていたのか。「私」にとって「大殿」は映ったものしか我々は知りえない。とすればまず、「私」にとって日のだから、「大鵬」も、その他の人物や事件も、すべて「私」の眼に内容も取捨選択されていると考えられる。さらには「私」の手紙な

「私」には手紙を書く明確な目的があり、それにあわせて手紙の

ぬという気が、頭のどこかに残っているためなのだ……。(Ⅱ)

何だったのか。また、

あろうか。君はそれをあわれむであろうか。(Ⅲ) を土城郭の大火災、(略) ——それはあたかも壮大な何ものかが安土城郭の大火災、(略) ——それはあたかも壮大な何ものかが東方の一王国の体制が崩れさっていた音だったかもしれないが、東方の一王国の体制が崩れさっていた音だったかもしれないが、東方の一王国の体制が崩れさっていた音だったかも北大な何ものかがを土城郭の大火災、(略) ——それはあたかも壮大な何ものかがを上、大野の死、壮麗なるうか。君はそれをあわれむであろうか。(Ⅲ)

> 史小説にかかわる問題も明らかになるに違いない。 で着目するだけですむのかどうか、ということだけでなく、先の歴 い考えを中心に手紙を順に読んでいくことが必要なのである。そうの考えを中心に手紙を順に読んでいくことが必要なのである。そうの考えを中心に手紙を順に読んでいくことが必要なのである。そうのように、主に日本滞在中のことを順に書き記した手紙の最後に

二 「私」の「生きる意味」と、「大殿」

うなり、潮の色調の変化にも、刻々に満ちわたる生命を感じた。 でが私は、(略) 九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかっただ私は、(略) 九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかっただ私は、(略) 九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかったが私は、(略) 九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかったが私は、(略) 九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかったが、海に満在する前から「私」は、つねに自分の「生きる意味」に日本に滞在する前から「私」は、つねに自分の「生きる意味」に日本に滞在する前から「私」は、つねに自分の「生きる意味」に日本に滞在する前から「私」は、つねに自分の「生きる意味」に日本に満たする。

まず「私」は手紙のはじめに、故郷ジェノヴァで妻とその情夫をる意味」とは何だったのか、ということを考えたい。を失った状態をさすと考えられる。そこではじめに、「私」の「生きがそれまで追求してきた「生きる意味」、あるいは「満ちわたる生命」がそれまで追求してきた「生きる意味」、あるいは「満ちわたる生命」がそ紙に書いた自己「崩壊」、「うしなったもの」とは、「私」

の生涯や「生きる意味」について考えるときに、この事件以前に立転換点になったといえよう。なぜなら、手紙のなかで「私」が自分

殺害したことを振り返る。この事件は「私」の生涯にとって大きな

は大きく変わらざるを得なかった。

悔恨を覚えることなく、もしそれが私の宿命であるならば、な んとしてもそれに屈しまい、(略)と誓ったのだ。(略)もし私 私が(略)妻と、妻の情夫を刺し殺したとき、私はいささかの

ことになってしまう。私は愛の激情から妻とその情夫を刺殺し ば、私の内なる自由も、激しい情念も、はじめから存在しない 力に支配され、その結果に、かかる行為を強制されたと信じれ ことになる。また同じようにして、私がそのような宿命の暗い がそれを罪と感じ、法に服するとすれば、私が抱いた愛情とい た。しかもそれは私の自由意志により、私の自由な選択によっ い、人間としての誇りといい、すべて泥土のなかに投げすてる

配しているという姿勢は、殺害後ジェノヴァを逃れてリスボアへ渡 り、乞食やこそ泥となったときも、さらにノヴィスパニアに渡って 自分の「自由意志」を最上のものとし、それだけが自分自身を支

て行なわれたのだ。(Ⅱ)

軍の指揮官となったときも、つねに自分を支える唯一のものだった。

たちに身ぐるみ剝がれようが」(Ⅱ)、それは自分の「意志」だと考 た。時には滑稽なまでに、たとえば「道で石につまずこうが、馭者 自分の「意志」で乞食になり、「宿命」への挑戦のために行軍を続け

えるようにして生きてきたというのである。

新しい基準を支え通すために、私は自分のすべてを賭けなけれ こうして私は新しい道徳基準をつくったが、こんどはそうした 私はそれを悪とする道徳基準をも打ち砕かねばならなかった。 私は妻を殺害した。妻の情夫を刺し殺した。だが、その瞬間、

> 認する基準である。つまりこの基準とは、自分の「意志」を最上の 「私」の新しい道徳基準とは、妻とその情夫を殺害したことを是 る意志のみが一つの生きる意味だったのである。(II 意味がかかっている。私はそう感じた。私にとって、この支え

ものとする基準だといえるだろう。この基準を支えとおすことが、 「私」の「生きる意味」だったわけである。

察し、その生き方考え方を賞讃する。その考え方とは、例えば られている「尾張の大殿」と出会う機会があり、以後「大殿」を観

さて、長い航海生活を経て日本に渡来した「私」は、民衆に恐れ

は、自分自身さえ捧げなければならないのだ。大殿はこの掟を 彼にとっては、理にかなうことが掟であり、掟をまもるために

徹底的に、純粋にまもる。(II)

大殿が言う「事が成る」という言葉ほど、彼の行動のすべてをシヒッニート 感情をもち、この兵法家として名人上手の道を極めるために、 決して事は成らぬ、と信じていたのだ。(略)大殿ほどに繊細な 説明するものはない。そして彼は、事の道理に適わなければ、

う自分の目的を達成させるために、慈悲の気持など感情を捨てて、 の態度に接した「私」は、次のような感想をもつ。 「理にかなう」ことに徹する、というものである。こうした「大殿」

といったものである。つまり「大殿」の態度とは、「事が成る」とい

自らの感情をこえていった人を知らない。(Ⅲ)

私が「大殿」のなかに分身を見いだしたと言ったとしても、友 よ、それを誇張とは受けとらないでくれたまえ。(略)私が彼

ばならなかった。そこには人間の品位がかかっている。人間の

み──私はあえて人間の価値と呼びたい。(Ⅲ) に、ひたすら虚無をつきぬけようとするこの素晴しい意志をのに、ひたすら虚無をつきぬけようとするこの素晴しい意志をのなみ──この虚空のなかに、ただ疾駆しつつ発光する流星のようのなかにみるのは、自分の選んだ仕事において、完璧さの極限のなかにみるのは、自分の選んだ仕事において、完璧さの極限

「私」と「大殿」に感心し、彼を自己の分身とまで認識するようにて、自分の決めたことを貫徹する、という強い意志が共通している。て、自分の決めたことを貫徹する、という強い意志が共通している。と、自分の「仕事」(自己の「意志」を最上のものとする基準を支えて、自分の「仕事」(自己の「意志」を最上のものとする基準を支えて、自分の「仕事」(自己の「意志」を最上のものとする基準を支えること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、ること)を守ってきたのである。この一つの共通点があるからこそ、で、自分の「仕事」だけを中心に考えて、自分の、仕事」に対している。

さて、自身の目的のためには何もかも捨て、ただ「理にかなう」さて、自身の目的のためには何もかも捨て、ただ「理にかなう」さて、自身の目的のためには何もかも捨て、ただ「理にかなう」さて、自身の目的のためには何もかも捨て、ただ「理にかなう」られる。

なったのだといえる。

方にくれているのか。これまでの研究では説明がつかない。「私」が、なぜ「分身」が死んだからといって、その後十数年も途「大殿」に出会うまでは一人で自分の「意志」を貫いて生きてきたしかし「私」にとって、「大殿」 はあくまで「分身」にすぎない。

にまとわりつく「孤独」にばかり注目して手紙に書くことになる。たる生命」まで感じた「私」であったが、ある事件以降、急に「大殿」たすら「大殿」の生き方を賞讃してきて、ともに働くことに「満ちわたすら「大殿」の生き方を賞讃してきて、ともに働くことに「満ちわ視されてきた、手紙の(すなわちこの小説の)後半部分である。ひ

そこで重要になるのは、これまでなぜか全くといっていいほど無

| 「孤独」と、「私」の「崩壊」

想像する。 「荒木殿」が謀反を起こした理由とは、「大殿」の前酷な命令に不信「荒木殿」が謀反を起こした理由とは、「大殿」の苛酷な命令に不信をの事件とは、「大殿」の家臣、「荒木殿」の謀反である。善良な

神聖さをけがしたくないからなのだ。ただ一人、この暗い虚空神聖さをけがしたくないからなのだ。(略) 私はふと彼が荒木殿を愛していたのではないかと思った。(略) 私はふと彼が荒木殿を愛していた。「なぜお前はおれにがした。「老人よ」とその声は言っていた。「なぜお前はおれにがした。「老人よ」とその声は言っていた。「なぜお前はおれにがした。「老人よ」とその声は言っている。(略) なるほどおれは、男と思っている。残忍な男と思っている。(略) なるほどおれは、男と思っている。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見私はすぐ大殿の心を思った。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見私はすぐ大殿の心を思った。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見私はすぐ大殿の心を思った。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見ればすぐ大殿の心を思った。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見ればすぐ大殿の心を思った。(略) 私には、ただ彼の暗い顔が見ればすぐ大殿の心を思った。

のだ。完璧さへの意志なのだ。」(Ⅲ) るのではない。おれの求めるのは、人間の極みに達する意志なことがあるのだ。(略)いいか、おれは血をいたずらに求めてい老人よ、人間は、温情を与えることで下劣なものに成りさがる

うになるのである。
「仕事」において必要な「理にかなう」とこで「私」は、自分の「仕事」において必要な「理にかなう」である。「私」は、自己の生き方や考を得られなかったのだと想像している。「私」は、自己の感情を超えということに徹底して従う、そしてそのためには自己の感情を超える方になるのである。

は、やがて次のような認識をすることになる。ろを深く犯しはじめたような気がしてならない」(Ⅲ)と感じた「私」乃を深く犯しはじめたような気がしてならない」(Ⅲ)と感じた「私」である。

生き方から、うまれているように見えた。(Ⅲ)来たものではなかった。それはむしろ内部から――大殿自身のしかし大殿の顔に刻印された苦悩の表情は、そうした外部から

さらに次の引用。

を遂行しなければならなかった。/私が大殿のなかに見た苦悩ため、誰もが自分を殺し、自分をのりこえ、「理にかなう」方法のことに関しては、大殿は徹底的な献身を要求した。「事が成る」した態度をあえて他の武将、将軍、大名などにも要求した。こ情、惰性、習慣、威信、自尊心までを犠牲にした。そしてそう大震は「事が成る」ために自分のすべてを――自分の思惑、感大震さ

れていたという事実を、物語っていたのである。(Ⅲ)に近づくことができず、そこにおのずと孤独の黒ずんだ影が生が次第に周囲に畏怖をうみだし、その畏怖のため、人々は大殿が次第に周囲に畏怖をうみだし、その畏怖のため

の緊張の結果だった。が、それは同時に、そうした苛酷な要求の刻印は、一方では、自分のなかのこうした不断の克己、不断

をおこした側の、「明智殿」の心情を想像する。 しなければならない。こうした苛酷な自他への要求が、「大殿」の「明智殿」の謀反がおこる。「明智殿」は、「大殿」も賞讃するほど、そしてついには、「大殿」にとっても「私」にとっても最大の事件、そしてついには、「大殿」にとっても「私」にとっても最大の事件、でいるのである。 しなければならない。こうした苛酷な自他への要求が、「大殿」の「孤しなければならない。こうした苛酷な自他への要求が、「大殿」の「孤しなければならない。こうした前を想像する。

ではあるまいか。彼はその孤独の極限を支えきれない自分を感略の苛酷さをあえて遂行しえたが、同時に、佐久間殿のような略の苛酷さをあえて遂行しえたが、同時に、佐久間殿のようなと受けとられたのは、(略)彼のこうしたささやかな人間愛に対と受けとられたのは、(略)彼のこうしたささやかな人間愛に対して、容赦ない否認の断が下されたのではなかったであろうか。/その人間的な弱さを愛していたのではなかったであろうか。/その人間的な弱さを愛していたのではなかったであろうか。/その人間的な弱さを愛していたのではなかったであろうか。/その人間的な弱さを愛していたのではなかったである。(略)/だがして、容赦ない否認の断が下されたのではなかったの人間のない。/とがして、容赦ない否認の断が下されたのではなかったの人間の事件のさなかだったの中での一人だけの力業が一一その極限を意識しはじめたとしたら、それはまさに、荒木殿、佐久間殿の事件のさなかだったの方、それはまさに、荒木殿、佐久間殿の事件のさなかだったの中での一人だけの力業が一半の極限を意識しばいる。/というは、大殿にまさるとも劣らぬ戦明智殿はその冷徹な理知のゆえに、大殿によったが、同時に、佐久間殿の事件のさなかだったの中での一人だけの力業が下されたのではない。

じた。彼はただその孤絶した高みに自らを保ちつづけるのに疲

ができないのを感じたのである。(Ⅲ)感じた。この眼が鋭く自分をみているうちは、自分は休むこと値は自分をさらに高い孤独の道を辿るように促がす一つの眼を彼は自分をさらに高い孤独の道を辿るように促がす一つの眼を

また彼の心を想像する。長いが引用しておきたい。(「武田軍団」を壊滅させ、凱旋してきたときの模様)を思いおこし、つづけて「私」は、謀反直前、最後に「明智殿」を見かけたとき

ながめ、歓声の波がゆれ、人々が踊ったり、歌ったりするのをめる表情であった。彼は時おり、驚いたように、自分の周囲をりに対照的であった。それは憂鬱な、暗澹とした、物を思いつの暗さである。それは周囲の歓声や笑いや叫びと較べて、あましかし私がいまでも忘れられないのは、そのときの明智殿の顔しかし私がいまでも忘れられないのは、そのときの明智殿の顔

眺めていた。/そのとき、彼はこんなことをおそらく考えてい

りにつきたい。疲れはて、気力も尽きはてたのだ。だが、おれりにつきたい。疲れはて、気力も尽きはてたのだ。だが、おれまない。その日その日が泰平にすぎて、春のつぎに夏が、そしてない。その日その日が泰平にすぎて、春のつぎに夏が、そしてない。その日その日が泰平にすぎて、春のつぎに夏が、そしてない。その日をの生命も消えてゆく。彼らが眠るとき、そのませ、遠い馬蹄にも心を許すことのない我々の夜とは、まっませ、遠い馬蹄にも心を許すことのない我々の夜とは、まったく違うのだ。/「彼らは、ああして踊ったり、飲んだり、愛しあったたのだ。/「彼らは、ああして踊ったり、飲んだり、愛しあった

ここで注意しなければならないのは、「私」が「明智殿」とほとんもれい。(略)」(Ⅲ)をおれは眠りたいのだ。ひたすら甘美な深い眠りのなかに落ちてゆきたい。(略)」(Ⅲ)のなりつめなければならぬ。名人上手の孤絶した高みへと。へのぼりつめなければならぬ。名人上手の孤絶した高みへと。

思えば不思議である。明智殿に関して憶えていることといえば、私が明智殿とも羽柴殿とも深い関係を結ばなかったのは、いまど面識がなかったということである。

情が反映されている、と考えるべきであろう。 した根拠のない「明智殿」の心情の想像部分にこそ、「私」自身の心は、まったく根拠のないものなのである。とすれば逆に、先に引用は、まったく根拠のないものなのである。とすれば逆に、先に引用っまり、先に挙げた「明智殿」の心のうちに対する「私」の想像でよったいたがとオルガンティノに頼んでいたのを見て、おどろいたことくらいである。(田)

う生き方に限界を感じた、ということに他ならない。 そこであらためて「私」の想像している「私」自身が、「孤独の極限」をうなわち、こうした想像をしている「私」自身が、「孤独の極限」をうなわち、こうした想像をしている「私」自身が、「孤独の極限」をうなわち、こうした想像をしている「私」自身が、「孤独の極限」をうなわち、こうした想像をしている「私」自身が、「孤独の極限」をうなかち、こうとに他ならない。 これはすいなう」 ことに徹底して、自分の感情を殺してまでも従う、ということに他ならない。 こう生き方に限界を感じた、ということに他ならない。 こう生き方に限界を感じた、ということに他ならない。

49

方では、自分の感情を殺さねばならず、そのために癒しようのないになった理由をあげることができる。それはつまり、「大殿」のやり

ここから、「大殿」の死、「大殿」の体制の崩壊が、「私」の「崩壊」

だ。この眼がおれを見ているかぎり、おれはさらに孤独な虚空

を見つめている一つの眼がある。(略)それは共感の眼なのだ。

ひそかに深い共感をこめて、おれを高みへと駆りたてる眼なの

「私」は、「大殿」の生き方、考え方、「意志」を高く評価してきた。「孤独」を生んでしまうのだと、「私」が気づいたことからきている。

「理にかなう」ことに従ってきた「名人上手」である「明智殿」が自分の生き方、考え方の限界を確認した、ということになる。同じとを契機として、最終的には「明智殿」の謀反によって、「大殿」やとを契機として、最終的には「明智殿」の謀反によって、「大殿」やとを契機として、大殿」にまとわりつく「孤独」に注目したことを契機として「大殿」を「分身」とみなしたように、自分自身も自分の意そして「大殿」を「分身」とみなしたように、自分自身も自分の意

像できる。

の「崩壊」とは何だったのかということをもう少し考えたい。すなわち「私」の「崩壊」となってしまったのである。以下、「私」つまり「私」は、自分のかつての「生きる意味」や生き方を否定し、の「生きる意味」と、これまでの歩みとを否定することに等しい。の「生きる意味」と、これまでの歩みとを否定することに等しい。の「鬼の「私」の「崩壊」が、失ってしまったのである。以下、「私」にとって衝撃であったに違いない。謀反をおこしたことは、「私」にとって衝撃であったに違いない。

四 「私」の「崩壊」の意味

ものであった。

に従うという証拠ではないか。(Ⅱ) も信じないというのは、なにより、彼が理にかなったことのみ彼が神仏を信ぜず、偶像を軽蔑し、眼に見えるもののほか、何

的な判断、客観的な認識にすべての基準を見出すことができるのだそ、「理にかなう」という、人間(あるいは自己)を基盤とした合理にいえば、宣教師たちとは違って神を信じないという立場だからこて「私」の三人だけは、信仰心のないことが明確にされている。逆作中、「理にかなう」考えに従ってきた「光殿」、「明智殿」、そし作中、「理にかなう」考えに従ってきた「光明』、「明智殿」、そし

えを無視し、自分の「仕事」だけに固執するということは容易に想ンデュラスで指揮官をしていた頃の記述)のように他者の感情や考的な判断を下す人間が、例えば次の引用(「私」が日本に来る前、ホとした、自己中心的な考えのあり方だといえる。そして、自己中心志」を最上のものとする「私」の思想も、まぎれもなく自己を基盤と考えられる。右に引用した「入門」とけでなく、自分の「自由意と考えられる。

の固執する「仕事」のために役立つものだけを必要とする、というしてすべてを客観的にながめ、「理にかな」ったもののなかから自分さて、「事が成る」ために「大殿」がとった方法は、自己を基盤とだと感じられたからだ。(Ⅱ) だと感じられたからだ。(Ⅱ) がとった方法は、自己を基盤とがと感じられたからだ。(Ⅱ) がとった方法は、自己を基盤とさて、「事が成る」ために「大殿」がとった方法は、自己を基盤とさて、「事が成る」という。

かった。(Ⅲ) をしていた。事を成就せしめぬような知識はがらくたにすぎな理する立場の人間として、たえず「事が成る」ための力を必要理する立場の人間として、たえず「事が成る」ための力を必要らのみ、問題をながめた。(略) 大殿は「事が成る」という見地かただそのいかなる場合にも、大馬は「事が成る」という見地か

る以上、「大殿」も含めてすべての人の人間性や感情といったものは、断に基づくものである。客観的な認識が徹底して最上のものとされ人上手」と賞讃したのも、「佐久間殿」を追放したのも、こうした判いうことのみで判断される。「大殿」が「羽柴殿」や「明智殿」を「名いうことのみで判断される。「大殿」が「羽柴殿」や「明智殿」を「名いうことのみで判断される。「大殿」が「狼栗殿」を「名いったとのみで、と

陥っていく「孤独」であるともいえるだろう。にかなう」考えに徹することで、「大殿」自らが人間性、感情を失いにかなう」考えに徹することで、「大殿」自らが人間性、感情を失いに、孤独」とは、まさしく他者の感情を無視する、という態度が周無視されるべきものに違いない。イタリア人の「私」が限界を感じ無視されるべきものに違いない。イタリア人の「私」が限界を感じ

これまで「孤独」から「私」の「崩壊」の原因を探ってきた。ひ

高み」へとのぼりつめるしかない。そこには「私」の記しているよどうかで判断するという仕方では、人間性の疎外された、「孤絶したとうかで判断するという仕方では、人間性の疎外された、「孤絶したとうかで判断するという仕方では、人間性の疎外である。人間(自己)を基盤とした客観的認識の弊害とことでいうならば、「理にかなう」考えに徹することからおきた、とことでいうならば、「理にかなう」考えに徹することからおきた、とことでいうならば、「理にかなう」考えに徹することからおきた、

を最上のものとしてまもることを唯一の「生きる意味」としていた。妻とその情夫を殺害後、「私」は自己の「自由意志」「道徳基準」うに、「深い甘美な眠り」などは存在しないのである。

方の「崩壊」であるともいえよう。 「大殿」と共通する生き方のことだと考えて間違いないだろう。「私」が手紙に書きたかった「うしなったもの」とは、そうした「秋」が手紙に書きたかった「うしなったもの」とは、そうした「秋」が手紙に書きたかった「うしなったもの」とは、そうした「似」が手紙に書きたかった「うしなったもの」とは、そうした「似」が手紙に書きたかった「理にかなう」考えのもとで処理してきた。自己中心的に、すべてを「理にかなう」考えのもとで処理してきた。

きる意味」が「うしな」われたこと(=「崩壊」)を友に書き送ろうその答えはすでに明らかになったと思う。この手紙は、「私」の「生に着目するだけの読み方で足りるかどうか、という疑問を述べたが、はじめにこの小説(=手紙)が、単に「大殿」の高貴な「意志」

るいは「大殿」のような生き方に、限界を感じて「崩壊」した物語によって賞揚される物語なのではなく、逆に「私」が、自分の、あことになった。『安土往還記』は、高貴な「大殿」の生き方が「私」と、よりはっきりと確認する身が崩壊していた音に思えてならぬ」と、よりはっきりと確認する身が崩壊していた音に思えてならぬ」と、よりはっきりと確認するとしたものである。そして手紙を書いているうちに、「ひょっとするとしたものである。そして手紙を書いているうちに、「ひょっとする

ま と め

五

なのである。

以上のような検討を経ると、「私」の抱えた問題が、現代に生きる以上のような検討を経ると、「私」の抱えた問題が、現代に生きるいがなかったことを示すものである。

楽しみうる小説であるともいえる。だが、この小説を、「私」を中心どではない、といいきることはできない。歴史小説としても十分にもちろん織田信長が簡単に想像されるわけだから、新しい信長像ないうことではない。注目すべきは、「大殿」の生き方や考え方である。こうした問題を考えるとき重要なのは、「大殿」が織田信長だ、とこうした問題を考えるとき重要なのは、「大殿」が織田信長だ、と

人の抱える現代的な問題が、歴史の舞台をかりて描かれたものなのもはやいうまでもない。この小説は、「大殿」や「私」といった一個へと「転向」あるいは「後退」した、という批判があたらないのも、はすまない問題が存在することは明らかである。辻邦生が歴史小説により詳細に検討するとき、単純に歴史小説としてとらえるだけでにより詳細に検討するとき、単純に歴史小説としてとらえるだけで

あってなっ。 はよいのか――それは、ゴアで十数年も「無為」に日々を過ごす「私」 得ることができないのを「私」は知った。ではどうして生きていけ得ることができないのを「私」は知った。ではどうして生きていけ

るのである。 さのである。 さのである。 そうした読みを経てこそ、辻文学の「精神性の高い」世界がある。 そうした読みを経てこそ、辻文学の「精神性の高い」世界がある。 はいて十分な分析がなされる必要

È

- は現在まで、何か新しい素材にぶつかって、それを作品化するというよ年一月などに収録。引用は後者より)などに述べている創作方法で、「私九六八年六月。のち『辻邦生作品 全六巻』6、河出書房新社一九七四、(2) 尾崎秀樹「大殿の意志」(『海の文学志』白水社一九九二年八月)など、(2) 尾崎秀樹「大殿の意志」(『海の文学志』白水社一九九二年八月)など、(2) 尾崎秀樹

- 問題がある。
 問題がある。

 の媒体を求め、それがたまたまある形式なり、地方・出来事・人物なりの媒体を求め、それがたまたまある形式なり、地方・出来事・人物なりの媒体を求め、それがたまたまある形式なり、地方・出来事・人物なりのな方法はとらなかった。つねに主題の側からのみ、その具体化のためうな方法はとらなかった。つねに主題の側からのみ、その具体化のため
- 源髙根「『安土往還記』について」(「国文学」一九七四年一月)
- (5) 参考までに、遠藤周作との対談「歴史と現代文学」(「文學界」一九七(5) 参考までに、遠藤周作との対談「歴史の来材に関心があることは事実ですね。まったくそうじゃなければ、別の来材を使ってもいいわけですから。使っている以上は、歴史小説という責任を負わされる……というのはへんな言い方だけれども、「配収録。引用は後者より)から辻の発言を引用しておきたい。「(略) しに収録。引用は後者より)から辻の発言を引用しておきたい。「(略) しに収録。引用は後者より)から辻の発言を引用しておきたい。「「歴史小説」(「文學界」一九七
- (6) ただし、饗庭孝男氏は「解説」(『安土往還記』新潮文庫一九七二年四(6) ただし、饗庭孝男氏は「解説」(『安土往還記』が「歴史という枠をかりながら、中心の喪失に苦しむ現代人に一つの指標を与えようとする」ものだと指摘していることは重要であり、その意味で他の『安土往還記』が「歴史という枠ものだと指摘していることは重要であり、その意味で他の『安土往還記』が「歴史という枠をかりながら、中心の喪失に苦しむ現代人に一つの指標を与えようとする。

「大殿」を信長と考えることを否定している。 「大殿」を信長と考えることを否定している。 既の所とである。おそらくそれによって読者は、既成の信長ならぬ、一個の内実である。おそらくそれによって読者は、既成の信長ならぬ、一個の内実である。おそらくそれによって読者は、既成の信長ならぬ、一個もので、それを埋めるのは、作品の中から読者が自分で感じたこの人物と呼ばないのは、(略)そこに一種の空白の輪廓だけを描いておくようなと呼ばないのは、(略)そこに一種の空白の輪廓だけを描いておくような

- 8) 本論では詳しく検討しなかったが、「私」の「崩壊」原因は、もうひとつ存在するのではないかと考えている。自分の「自由意志」で行動してきた「私」は、「大殿」の組織の「歯車装置の一つ」になることで、「満ちたる生命」を感じてしまった。「大殿」がでんでしま点ば、ただの役に立たない部品になってしまう。そこ殿」が死んでしまえば、ただの役に立たない部品になってしまう。そこからくる「崩壊」である。これも突き詰めれば同じ原因であるともいえからくる「崩壊」である。これを受き詰めれば同じ原因であるともいえよう。つまり、「理にかなう」ことに徹することからおきる人間性の疎外である。また、「私」が「歯車」になって満足する背景には、もともと「私」が理想とするものの下につきたいという願望があったことがあげられる。ともかく、このもうひとつの「崩壊」原因については、機会があれば今ともかく、このもうひとつの「崩壊」原因については、機会があれば今後考察する場を設けたい。

- (1) 「毎日新聞」一九九九年七月三十日朝刊(一面)、「余録」より。

巻中の第一巻(一九九三年六月)に拠った。[付記]本文の引用は岩波書店刊『辻邦生歴史小説集成』全十二

における口頭発表に基づき、加筆・訂正を施したものである。また本論は、大阪大学国語国文学会 (二〇〇二年一月十二日)

いた。ここに記して深く感謝の念を表したい。発表に際し、先生方ならびに会員諸氏に貴重なご意見をいただ

---本学大学院博士後期課程(く感謝の念を表したい。